（二〇二〇年度）

6 国語問題（六〇分）

（この問題冊子は23ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能を使用してはならない。また、スマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
　また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
八、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
九、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十一、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

顔と身体とは「かくれんぼ遊び」をしている、と指摘するのはE・ルモワーヌ＝ルッチオーニである。「衣服で身体を覆うことは、顔にコミュニケーションの優位を譲ることであるが、仮面は身体をふたたびコミュニケーションの道具にする」と、『衣服の精神分析』のなかで彼女は言う。衣服で身体を覆い隠すことによってひとはコミュニケーションの中継地点（あるいは「人間的」な意味が凝集する場所）を顔面へと凝集させるが、仮面で顔面を覆うことによって（あるいは顔面に顔料を厚く塗りこめることによって）顔面の意味作用が消去され、[1]それと反比例して、身体の各部位がその減却された意味作用を回復するということである。[2]そして後者の手法を様式化したのがパントマイムだというわけだ。われわれの身体表面における人称化の動性と脱人称化の動性、あるいは、だれかになることとだれかでなくなること、この二つの契機が顔と身体のあいだで交差する。

ここで、[3]仮面を装着することによって顔面の意味作用を消去ないしは減却するというのは、顔を偽ることではない。たしかに、「顔を偽る」、あるいは一般に「顔を作る」という言葉があるように、われわれは顔を偽造し、それを遮蔽幕（しゃへいまく）として顔の背後に隠れることができる。つまり、「顔を偽る」という表現は、顔面の「向こう側」があって、それとの関係が顔の「真偽」を決めるのだという考えを前提している。顔の「向こう側」（だれかあるひとの「自己」、あるいはそのひとの心情や内面？）が顔の真偽を決める、つまり顔には「素顔」と「にせの顔」「偽りの顔」があるのだとするならば、顔ははじめから見かけ、つまりは仮面にほかならないことになる。ひとが顔をマスクと呼ぶのも、理由のあることなのだ。しかし、すぐれて顔ということのできる特権的な顔が、ほんとうに存在するのだろうか。だれかある人格がそこにありありと現前しているような顔とはどういう顔なのだろうか。あるいは、そこに「本人」のメッセージが出ている場、あるいは「主体」がそこからのぞける穴としての顔とは？

実際、われわれはほんとうにだれかあるひとを見ることができるのだろうか。もしできれば、どれほどかこころが休まるはずだ。しかし事実は逆で、われわれはなんとか他人を見よう、せめてその存在を視覚的にとらえようとして、彼の身体表面に視線をやるのだが——とはいえ実際には、他人の視線によって追い払われ、すごすご引き下がることのほうがはるかに多い

――、その視線が着地すべき地点が分からぬまま、視線をうろうろ漂わせるばかりだ。

ところで、ほんとうの顔、偽りの顔という言い方は、顔の本来あるべき状態、つまり「素顔」という観念を前提している。ということは、「素顔」という観念を解除すれば、仮面ないしは覆面イコール偽りの顔という等式も崩れるはずだ。そしてそのためには、そもそも「顔の向こう側」というものがほんとうに存在するのか、そのことがまず問われねばならない。

[4]〈顔〉はわれわれの社会では、つねに「だれかの顔」である。[5]あるひとがだれであるかは、最終的には顔の同一性によって確認される。身分証明書や受験票の顔写真、行方不明者・身元不明者・指名手配者の照会ポスター……。もちろんこれらの顔写真はだれかの「素顔」を撮ったものであって、仮面を被ったもの、「素顔」を覆い隠すほどに厚化粧を施したものであってはならない、とされている。しかし、「素顔」というのも、ほんとうはそのようなものとして自他のあいだで了解されている〈顔〉のことではないのか。そもそもだれかの「ありのままの顔」といったものが存在するのだろうか。

ところで、ここに、クリフォード・ギアツが普遍というものをどうとらえるかという文脈で述べたおもしろい議論がある（「反・反相対主義」）。概要だけかいつまんで紹介すると次のようになる。

噛（か）む、噛みつく、といった行為は、人間にとって格別不自然なものではない。しかし、他人の身体の一部を食いちぎらんばかりに激しく噛み、しかも噛みつくことそれ自体に密（ひそ）やかな快感をおぼえるとなると、それは、サディスティックな行為、それもおぞましく「倒錯的な」行為だとみなされる。その理由はふつう、そうした行為が人間性、つまり「人間の自然」を逸脱しているから、あるいはそれに悖（もと）るからという点に求められる。しかしもしそうだとすると、「サディズムはあまりに深く噛みすぎないかぎりは自然な行為である」という理屈になる。逆にあまりにきつく噛みすぎると、人間にとって自然なものがそのまま自然に反するものへと裏返ることになる。正常／異常にかぎらず、善／悪、健康／病いについても、それを「人間の自然」に適（かな）っているか否かという視点から見てゆくと、[6]かならずこうした奇妙な議論にはまり込んでしまう、というのである。

われわれの考えでは、「噛む」という行為とともにこうした議論に格好の例を提供するのが、化粧という行為である。たとえばプラトン（＝ソクラテス）の化粧論。弁論術批判という文脈においてであるが、プラトンは『ゴルギアス』のなかで、「身体の

世話」にかかわる技術として医術と体育術があるとしたあと、そうした技術にもぐり込んでそれを詐称するものとして、医術における料理法とともに体育術における化粧法を挙げ、それらをきびしく批難している。根拠として提示されるのは、たとえば次のような論点である。

医術のもとには料理法がその仮面を着けてまぎれこみ、おべっかをこととしているのは、いま言ったとおりであるが、これと同じようにして、体育術のもとには化粧法という、悪賢くて人をあざむき、低級で卑屈な性格のものがもぐりこんでいる。[7] それは、姿態により、皮膚の色となめらかさにより、また、衣装によって人目をあざむき、人々をして自己本来のものならぬ美しさをよそから借りて身につけることに熱中させて、体育術によって得られる自然本来の美しさをなおざりにさせる……。

（『ゴルギアス』）

ありのままの美しさ、あるいは「自然本来の美しさ」の凌辱（りょうじょく）という論拠。これは、次のようなかたちでガレノスの化粧術批判においても反復されている。

身づくろいの技術（コスメティック）は医学の一部であり、化粧術（コモティック）とは異なる。化粧の目的は、異様な美を実現することであり、医学の一部である身づくろいの目的は、全身を全くありのままに保つことなのである。したがって、それは自然の美しさとなる。

（O・ブュルジュラン「化粧散歩」より）

[8] われわれの存在の可視性の変換という同じ一つの行為が、ここでは「自然の美しさ」へのかかわりかたを規準として、身づくろいと化粧へと分割されている。しかし、そのうち何が衛生管理とでもいうべき準医療技術に属し、何が美容という過度の行

為とみなされるのか、その根拠をたどってゆくと、先のギアツの議論ではないが、その境界線がひじょうに曖昧であることがわかる。ファンデーションは衛生管理を逸脱しているのか否か？　香水をつけるのは体臭の管理という義務に属するのか、それとも一種の耽溺行為なのか？　整髪は？　義歯は？　口紅は？　スカートは？　ストッキングは？　ハイヒールは？

ここでは、コスメティックかコモティックかという相違は、恣意的に設定された境界にもとづいたものでしかないのであって、問題はむしろ、同じ自然の変換行為のなかでも何を許容し、何を禁止するかという、その分割の規準のうちに、時代のどのような強迫観念に人びとが共同して憑かれていたのかを読みとることのほうにある。

9 このようにわれわれの可視性の表面は、一方で、特定の厳密な変換規則によってくまなく被われている。あらゆるひとが他者の可視性との微妙な差異にその存在を賭けている。が、他方で、そうした差異も少し距離を隔てると、ほぼ同一のスタイルによって編成されているのがわかる。そして服のライン、上下の境目、開口部、髪のカット・ライン……それらが人びとの可視性を囲い、支える共通の透明の枠（あるいは檻？）のように見えてくる。可視性はしかし、なぜいつも共同的なかたちで解釈されねばならないのか。そうした共同的な解釈行為は、なぜ可視性を加工・変形する行為となって発生するのか。われわれはここでむしろそのように問うべきだろう。

10 何の加工も変形も施されていないような顔は存在しない。顔の自然性とは一つの虚構であり、それはつねにすでに侵犯されている。問題はだから、顔の可視性はなぜつねに別のものへと変換されねばならないか、あるいは、顔は何に向けて（あるいは、どのような観念に憑かれて）変換されるのか、という点にあるといえる。

（鷲田清一『顔の現象学』）

〈注〉ガレノス…紀元後二世紀の医学者

問一　傍線部1について、「身体の各部位がその減却された意味作用を回復する」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　身体のそれぞれの部位が、顔の露出によって減らされたコミュニケーションの力を取り戻すこと。

b　身体のそれぞれの部位が、顔のもつ「人間的」な意味によって減らされた個性を取り戻すこと。

c　身体のそれぞれの部位が、服を着ることによって減らされた物質性を取り戻すこと。

d　身体のそれぞれの部位が、衣服で隠すことによって減らされた身体の美しさを取り戻すこと。

問二　傍線部2について、「後者の手法を様式化した」とは、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　顔面のコミュニケーション優位を取り除き、顔面以外の身体のコミュニケーションに新しい意味をもたせる方式をつくること。

b　顔面の意味作用を消去し、顔面以外の身体の意味作用を一つの表現のかたちにすること。

c　顔面のもつ「人間的」な意味を剝奪(はくだつ)し、顔面以外の身体が「人間的」な意味を持てるようにシステムをつくること。

d　顔面へ注目することをやめさせ、顔面以外の身体が注目されるような一つの形式を作ったということ。

問三　傍線部3について、このように筆者が考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　仮面をかぶることは「素顔」を隠すことであるが、顔を偽造して自らをよりよく見せるような考えは持っていないから。

b　仮面をかぶって顔面の表現能力を使わないようにすることは、「自己」を保持することで偽る行為ではないから。

c　仮面をかぶらないと顔面の意味作用は消えることがなく、顔を偽ること以外の表現も表出してしまうものだから。

d　仮面をかぶらなくても、そもそも顔には「素顔」と「向こう側」の顔があると想定されており、仮面をかぶったようなものだから。

問四　傍線部4は、どういうことを言っているのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　〈顔〉というものは、社会の中では特別意識されているものではなく、個人とは別の機能をしている。

b　〈顔〉というものは、社会におけるコミュニケーションの最高の武器であり、自己に密着したものである。

c　〈顔〉というものは、われわれの社会においては特定の個人を表示するものである。

d　〈顔〉というものは、われわれの社会ではじめから見かけであり、「素顔」と「にせの顔」の二面を持つ。

問五　傍線部5は、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　あるひとがだれであるかは、身分証明書などの写真と「ありのままの顔」とを照合して認知している。

b　あるひとがだれであるかは、「素顔」と「ありのままの顔」が同一であることに基づいて認定される。

c　あるひとがだれであるかは、厚化粧などの「偽りの顔」から「素顔」を抽出して確認するものである。

d　あるひとがだれであるかは、ある顔と「素顔」とを一致させることをもって認識するものである。

問六　傍線部6について、「奇妙な議論」とは、どういうものか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　「人間の自然」という規準から見ると、サディズムは深く噛みすぎないかぎり自然な行為となり、強く噛むとサディズムになるように、反転性が認められるということ。

b　「人間の自然」という観点は、噛む強さによってサディズムにも普通にもなるという点において倒錯的な見方であるということ。

c　「人間の自然」という見方には、噛むことを自然とする考えが含まれており、強く噛むことだけをサディズムとするのは普遍性を欠くということ。

d　「人間の自然」という考え方には、極端なものを排除する傾向があり、強く噛むことは倒錯と認定されるということ。

問七　傍線部7について、プラトンが「化粧法」をこのように悪く言う理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　化粧法が、体育術によって実現させる皮膚の色の美やなめらかさは、一過性のものであるから。

b　化粧法が、体育術の授けるべき人の自然な美しさを、先まわりして教授しているから。

c　化粧法が、体育術によって得られる人々のもともと持っている美しさを、大切にしていないから。

d　化粧法が、体育術の一部であると擬装して美を伝授しているから。

問八　傍線部8について、「われわれの存在の可視性の変換」とは、どういうことか。次の中から適切でないものを一つ選べ。

a　わたしたちが自らの存在を、自然の美しさにしたてあげてゆくこと。

b　わたしたちが自らの身体を、他者に見られることを前提として加工すること。

c　わたしたちが自らの存在を、物理的見地からとらえて美しくしてゆくこと。

d　わたしたちが自らの身体を、化粧によって美的存在にしてゆくこと。

問九　傍線部9について、「特定の厳密な変換規則」とは何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　ある時代にある個人によって設定された境界。

b　ある時代に存在する人々の趣向の微妙な差異。

c　ある時代に特有の強迫観念によって導き出されたおぞましきルール。

d　ある時代に人々の共同性によって成立している同一の様式。

問十　傍線部10について、このように筆者が考える理由は何か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　顔は、医療技術の発達と連動して変化するから。

b　顔は、美しさをめざして変形させられる運命をもっているから。

c　顔は、自然本来のままを保とうとしても成長、老化で変化するから。

d　顔は、時代や文化のもつ共同性によって影響を受けるから。

二

次は、シモン・ヒッセリング著、津田真道訳「表紀提綱」(明治七・一八七四)の一節である。原文は漢字片仮名交じりであるが、平仮名交じりに改め、適宜濁点・句読点・振仮名を付した。これを読んで後の問に答えよ。尚、本文中「表紀」は「表記」ではない事に注意する事(本文中に「表記」の例は無い)。

表紀の原語をスタチスチキと謂ふ。其義を直訳すれば邦国又は形勢と謂ふ事なり。蓋し一国数国乃至万国の人民互に相生養する実際の形勢を知る学術なり。此形勢を名づけて人間会社又は人間仲間と謂ふ。

実際の形勢とは凡そ事物現に存し、実に有る所の形勢にして、表紀は、唯其有りの儘の形勢を表章して、絶て兎あるらん角あらんと臆度を用ふる事なし。

表紀は相生養する人間の実際形勢を表章するを主とし、一箇特立の学術にして、其講窮する所の区域、人間仲間の事に止まる。世に星天表紀植物表紀等の語あり、星天表紀は天穹の星数を統紀し、植物表紀は各地草木の種類を表章す。然れども此[1]は仮借の語にして、其本義にあらず。

表紀に掲示する所の実際形勢、或は唯一郡一州に限り、或は広く数国乃至万物に及ぶ故に、此学の区域広狭一ならず。

一国の表紀は例へば尼達蘭表紀の如し。尼達蘭全国の総形勢を表章す。総形勢とは国土の形勢、人民産物実有の形勢、戸口及び其増減、民力の多寡、人民の貧富、産業等の総形勢なり。而して産業は農工礦漁貿易航海等に別ち、就中特に其一事を表章する事あり、例へば尼達蘭十年間貿易表の如し。

或は事数国の人民に連及し、其異同を比較するを要する者あり、例へば欧羅巴各国の貧民表の如し。

或は物に因りて全地球に渉る所の者あり、五大洲中各地の実際形勢を審知するを要す。例へば金銀或は綿花の産額及び之を消費する数の如し、勢広く大地全球上に渉らざるを得ず。

表紀は人間仲間の事実を知る学問にして、其目的は其事件の現に存し、実に有るを表章するに在り。

或人曰く、表紀の目的他なし、唯新を知り奇を著すのみと、若し果して此説の如くならば、[2]表紀の人間に裨益ある微なりと

謂ふべきのみ、然れども世間に此類の表紀徒に人の娯楽に供するのみにして事実を誤り実用を闕く者往往是あり、就中新聞紙上に散見する所の表紀大概此類なり。表紀の目的とする所は真正明確なる事実を検知し、善を取り悪を捨て、古来慣習の事と雖、其実理に悖戻せる事明晰なる者は務て之を改革するに在り。

表紀の目的とする所、此の如くなれば、其人間に裨益ある事洪大なり、就中執政大臣の為には真に闕くべからざる宝典たり。羅馬の先賢子世路子曰く、元老議政の官員は通国の形勢を知らざるべからず、形勢の字其該る所極て広し、本国の兵勢如何、財政如何、又同盟与国は何等の国なりや、有事の日に当り其援兵幾許を得べしや知らずんばあるべからずと云へり。凡そ何れの国にても当路の君子法を制し令を出すに丁り、予じめ本国実有の形勢を知る事肝要なり、兵備を修むるには国内の軍人と為すべき丁男の数を知らずんばあるべからず、租税を征するには財産品物民力の多寡を知らざるべからず(例へば田数戸数等の如し)、獄舎を設るには罪人の数を知らざるべからず、又交易航海を盛大にせんと欲せば審に本国並に隣国の交易航海の事情を知らざるべからず、若し夫れ凶荒の患ありて政府救災の法を設んと欲するには、国民所需の穀数と之を外国より購求する費用とを知らざるべからず、而して此の如く特に一箇の事実を表章する者を称して単示表紀と謂ふ。

表紀の検討従事する唯此に止まらず、唯一時或は一国の形勢事実を知るのみを以て足れりとせず、之を往昔又は外国に比較して其異同を熟察するを要する事あり、此の如き表紀を名けて比較表紀と称す。

本国の民口往時と比較して増減奈何を知らんと欲するには、目今の口数を十年前、或は二十年前乃至三十年前に計算したる所の口数と比較すべし、又新に法を制し令を出して其得失如何を知らんと欲せば、法令頒告前の形勢と頒告後の事状を比較すべし、譬ば近時英仏二国交易の条例を約したるに於て其得失を知らんと欲せば、新約締立前若干年間両国交易の形状と約後同時限内商額の多少とを比較して之を判知するが如し。又甲乙両地の形勢異同、譬ば都鄙人民の比例奈何を知らんと欲せば両地形勢の記載を参照すべし。

比較表紀の人間仲間上に大裨益ある事右の如し、若し夫れ事論の是非孰れか決し難き時は、此比較表紀に就て其事蹟実効を視れば、其利害得失直に判然明瞭にして疑を容るべからず、故に曰く、比較表紀は律法の是非得失及び他の事件沿革の善悪を

判する試金石[8]に比すべく、又旧法の改正すべき事を徴証し、又悖理の論説を駁(ばく)し、古来の臆説を照破する明鏡[9]に擬すべきなり。

夫れ事物を経験する事、月を累ね歳を歴るに由て其事物に終始本末ありて脈絡互に貫通する事を知り、以て人生の景象造化の功用斉(ひと)しく一定[10]の規矩ある事を発明するに至れり。而して此発明に因て吾人の学識を長じ、人間の利用を弘大ならしむ、其裨益亦大ならずや、蓋是、表紀学結局の目的なり。

星学士天体の運歩を実験して遂に星体の運歩を統轄する所の天律を発明するに至れるが如く、表紀学士も亦相生養する人間仲間の事実を歴験して以て吾人の生活と作業の上にも亦之を統管する所の自然の天律ある事を覚知するに至れり。

天文学士の発明する所、人間仲間に大利益を為したるが如く、表紀学士人の生活作業を統轄する所の天律を検知し、人間仲間に利用厚生の道を興せり。

〈注〉 ○スタチスチキ…statistiek(統計)　○人間会社…ここでは現代語の「人間社会」の意味　○尼達蘭…ネーデルラント(オランダ)　○羅馬の先賢子世路…紀元前一世紀のローマの政治家キケロー(Cicero)　○元老議政…ローマの元老院(Senate)　○悖戻…もとり、そむく　○凶荒…農作物の凶作

問一　傍線部1「此は仮借の語にして、其本義にあらず」は、どういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　統計は、主に人間の実際の形勢を仮に用いて、人間についての表章を行なうが、それは本来の意味に基づくものではない。

b　統計学は、仮に一分野の学問として独立して、一領域にその議論を限定するが、それは本来の意味ではない。

c　統計は、天空の星の数や草木の種類を用いて、人間の仲間として表章を行なうが、それは本来の用法ではない。

d　統計学には、天文学の統計(星天表紀)、植物学の統計(植物表紀)などもあるが、それは本来の意味に基づくものではない。

問二　傍線部2「表紀の人間に裨益ある微なりと謂ふべきのみ」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　統計が人間にとって有益である証拠であるといってよかろう。

b　統計が人間にもたらす利益は少ないものだといってよかろう。

c　統計はそれに関わる人間だけに有利である証拠といってよかろう。

d　統計はそれに関わる人間以外には有益ではないといってよかろう。

問三　傍線部3「古来慣習の事と雖、其実理に悖戻せる事明晰なる者は務て之を改革する」とはどういうことか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　昔からの習わしであっても、実際には理屈に合わない事があり、明晰な人たちは、熱心にこれを改めようとする。

b　昔からの習わしといいながら、実際は徐々に後退している事があり、明晰な人たちは、熱心にこれを改めようとする。

c　昔からの習わしであっても、事実と理屈に合わない事が明らかであるものは、出来る限りこれを改めようとする。

d　昔からの習わしといいながら、実際は徐々に後退していく事が明らかであるものは、出来る限りこれを改めようとする。

問四　傍線部4「形勢の字其該(かぬ)る所極て広し」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　形の字と勢の字の意味を合せると、大変広い意味になる。

b　形の字と勢の字の意味の重なる部分は、大変多数の意味を持つ。

c　形勢という語は、それが覆う意味の領域が大変広い。

d　形勢という語は、それが併せ持っている意味が大変多い。

問五　傍線部5「有事の日に当り其援兵幾許を得べしや知らずんばあるべからず」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　国際紛争になったとき、その国にどれだけの兵力を派遣して援助し得るかを、知らないでいるわけにはいかない。

b　国際紛争になったとき、その国からどれだけの兵力の援軍を送って貰えるか、知らないでいるわけにはいかない。

c　国際紛争になったとき、送られてくる援軍の兵士は、どれだけの収入が貰えるか、必ず知ろうとするものだ。

d　国際紛争になったとき、派遣する援軍の兵士は、どれだけの収入が貰えるか、必ず知ろうとするものだ。

問六　傍線部6「新に法を制し令を出して其得失如何を知らんと欲せば」の意味としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　新しい法律や政令を制定する前に、それを制定した場合の良い点・悪い点を推定しようとするなら

b　新しい法律や政令を制定した後に、その制定した結果の良い点・悪い点を調査しようとするなら

c　新しい法律を制定する前に、その結果の良い点・悪い点を政令を出して推定しようとするなら

d　新しい法律を制定して、その結果の良い点・悪い点を政令を出して調査しようとするなら

問七　傍線部7「若し夫れ事論の是非孰れか決し難き時は、此比較表紀に就て其事蹟実効を視れば、其利害得失直に判然明瞭にして疑を容るべからず」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　事実と理論のどちらを採用するか決め難いときも、統計に基づけば実際のありさまが見える以上、その利点・欠点は明白で、疑いの余地が無い。

b　事実と理論のどちらを採用するか決め難いときは、統計に基づいて実際のありさまを見るべきであって、その利点・欠点を疑うような事はあってはならない。

c　議論の正否が決め難いときも、統計に基づいて実際のありさまを見れば、その利点・欠点は明白で、疑いの余地が無い。

d　議論の正否が決め難いときは、統計に基づけば実際のありさまが見える以上、その利点・欠点を疑うような事はあってはならない。

問八　傍線部8「試金石」は、ここではどのような意味で用いられているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　それ自身が判断の材料となる資料

b　判断の結果としての価値の高い理論

c　それ自身は資料ではなく、資料を検査した結果

d　それ自身は資料ではなく、資料を検査するための道具

問九　傍線部9「明鏡」は、ここではどのような意味で用いられているか、次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　明らかにされた問題点の一部の反映

b　明らかにされた問題点全てを見渡す一覧表

c　問題を明白にし解消するための道具

d　問題を明らかに認識させるための道具

問十　傍線部10「一定の規矩ある事を発明するに至れり」の「発明」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　創作

b　聡明

c　発見

d　新案

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

たしかにスポーツの記号論モデル（タイポロジー）を構成するのはルール（つまりコード）である。このモデルについては次の節で述べる。ここではスポーツのルールが、いわゆる伝統的な文化の象徴的体系に属するのではないこと、それはある意味で近代なくしては成り立たなかったことなどを指摘しておこう。

あるスポーツがゲームとして成立するのは、どこでも、だれでもが理解できるし、概ね守ることのできるコードを基盤にしていることが条件である。国家を超えて選手が流入したり、文化の差異を超えて、試合が成立するとなると、文化の差異にこだわってはスポーツが成り立たない。たしかに同じスポーツでも文化によってあるスタイルの違いはある。イギリスのサッカーには多少とも荒っぽさがあり、オーストリーのは多少とも優雅であるとか、中南米は個人技が目だつとか言われている。しかしそれはルールには関係しない。ゲームのスタイルの差異である。ルールの方は世界的に共通し、文化的には中性的なコードになっていく。個々の文化に閉じた身体技法や儀礼には、その文化にそってしか理解できない慣習的な意味がある場合が少なくない。しかし現代のスポーツのルールは、もはやこうした固有の文化に閉じた象徴的意味はない。この本来的な無意味さは、閉鎖した個々の文化の意味体系を洗い流した結果である。そうしたローカルな意味に代わって、コードが世界的、普遍的な視野のなかで構成されるからである。コードがこうした認識の地平で成立するからこそ、スポーツに記号論モデルを想定しうるのである。この地平をわれわれは近代[1]と呼んできたのである。

よい例がエスニックな競技が国際的なスポーツになる過程に見られる。この場合、スポーツのコードのエスニシティはいわば漂白されねばならない。たとえばかつてはエスニックなスポーツであった柔道が世界的なスポーツに変身していった過程で、そこに含まれているナショナルな精神的伝統つまり非近代的な文化の残滓（ざんし）を払拭しなければならなかった。そのとき体重制、点数制などが導入されてゲームのコードは変化した。同じエスニックなものでもそれが不可能な場合もある。ほとんど古典芸能に近い相撲[2]の場合はそうはいかなかった。そのために逸材としてスカウトしてきた外国人を相撲の世界に内部化し、と

きには帰化させ、外部にたいしてはエスニックなスペクタクルとして存続する道を見つけたのである。

スポーツは身体活動からなるとはいえ、その記号論モデルは文化のモデルであっても、決して自然に根づかない。あるスポーツのゲームの遂行は、そのコードを尊重するかぎり合理的でなければならない。これに反するものは罰則を課せられる。だがあるスポーツでどうして足は使ってもいいが、手はいけないのか。それにはなんの自然的な根拠もない。たしかにいくつかの原型的なスポーツには、先行した形態があったと言いうるかもしれない。しかし記号論モデルとして検討するかぎり、もはやそれは自然に依拠するものではない。コードはゲームの持続する時間、ゲームの行われる空間の限定、選手の数、勝敗が決まる方法など、ゲームの成立と進行を決めるいっさいのものを含んでいる。どんなスポーツもコードの束である。あとで触れるように、コードを変更すると、スポーツは別のスポーツを生む。

[3] コードの機能とは、まずスポーツのタイプを決めることである。ゲームがコードにしたがって進行するというより、ゲームのタイプ(記号論モデル)がコードによって構成されるのである。ルールによってスポーツは完全に「現実の模倣」から脱するのである。しかし実際のゲーム、パフォーマンスの展開は、記号論的に言えば修辞学によるわけで、その展開に観客はエキサイトするのであって、コードにエキサイトすることはない。しかしコードによって展開するゲームがどんなにアナログ的多様の世界であっても、勝敗という結果はつねにコードによってディジタルな次元に還元されるのである。スポーツとはアナログかつディジタルなゲームであり、しかも勝敗＝ディジタルが最後に浮かびあがってくるゲームなのである。この勝敗については後で述べることにする。

記号論モデルとしてスポーツを考えてくると、[4] プロレスは実に興味深い。すべてのスポーツのなかでプロレスのゲームのみが修辞学的に「現実の模倣」を目指している。つまりあたかもどちらかの死に到る闘争であるかのような展開をする。プロレスをやるにはそれなりに超人的な肉体的条件は必要である。その肉体の衝突によって遊戯としてのスポーツの限界を超えるように見えることが必要なのである。その時、この格闘は、あらゆるスポーツが偶然にとみながら、全力を注いで目指している勝敗を脱意味化し、スポーツが洗いながしてきた暴力を復活するように見えるパフォーマンスとしてゲームをプログラミング化

する。このプログラミングがコードに他ならないのである。プロレスは、現実に近づくように見えれば見えるほど、勝敗を無化してスポーツの概念を反転し、相対化するメタ・スポーツになっていくのである。

スポーツのタイプ(記号論モデル)は外界から切り離されているのではない。むしろコードによって社会との結びつきを強化するのである。どのようにしてか。たとえばコードを決めるには、なんらかの関係者の集団による合意を必要とする。この集団は当のスポーツがひろがればひろがるほど公共性を拡大する。そのことを考えると、スポーツの成立には公的な制度の確立が含まれている。スポーツは社会的な諸関係を制度に構成していくのである。その結果、スポーツはさまざまな団体に統括され、行政もからんでますます制度的性格を強めるのである。コードは少なくともそのスポーツにかかわる制度内での合意にもとづいて決められている。したがってこのコードに従うことを合理的と見なすことによってスポーツが成り立つとすると、コードは社会における生活、立法者その他の諸関係に基盤をもっている。しかもこのコードはこうした諸関係が近代的な視野に開かれ、公共性あるいは普遍性のひろがりのなかで見えるようになったときにしかありえないのである。つまりコードを成立させる基盤は歴史的に形成されたものなのであり、その歴史とはローカルな文化の風俗慣習のコードを抜け出す世界化の過程つまり近代化である。もともとはローカリティに縛られていた身体競技がスポーツ化するには、そうした地方性を脱しなければならない。つまりコードがローカルな文化的な意味や権力関係を完全に払拭して、中性化した規則になったときにはじめて[5]身体的な競争がスポーツになるのである。

(多木浩二『スポーツを考える』より)

〈注〉 タイポロジー…類型学。 エスニック…民族の。民族的な。エスニシティはその名詞形で、民族性、民族的背景を意味する。

問一　傍線部1はこの文脈でどのような状況を指すか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　イギリス、オーストリア（オーストリー）、中南米のサッカーの違いが示すように、各国ごとのゲームのスタイルの独自性がよく表れるようになった状況。

b　固有の文化の枠内でのみ理解される意味体系がスポーツから失われ、だれもが理解できるコードがスポーツに備わるようになった状況。

c　スポーツが伝統的な文化の象徴的体系に加えて、異なる文化の意味体系を視野に入れた、いっそう複雑なコードを備え始めるようになった状況。

d　異文化や外国人の流入によって個々の文化の身体技法や儀礼があるスポーツの中に入り込み、その中に異なる種類のコードが並び立つようになった状況。

問二　傍線部2に関する説明としてもっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　相撲は日本の精神的伝統、つまりエスニックな文化の残滓を残しており、その点で柔道に重なる。

b　相撲は外国人を相撲の世界に引き入れることを通じて日本固有の精神的伝統を払拭していき、その点で柔道に重なる。

c　相撲はナショナルな精神的伝統の払拭を推し進めておらず、その点で柔道とは異なる。

d　相撲は伝統的な身体技法や儀礼の刷新を通じて国際的なスポーツになり、その点で柔道とは異なる。

問三　傍線部3について筆者はどのように考えているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　観客はゲームのパフォーマンスの展開に興奮するが、ゲームが持続する時間、ゲームが行われる空間の限定などのコードに興奮することはない。

b　現在のスポーツにおけるゲームの選手の数、勝敗が決まる方法に関するコードは、自然的な根拠にもとづいて成立している。

c　スポーツは何らかの自然的な根拠を持たないコードで支えられており、それゆえコードへの違反も罰則の対象にならない。

d　スポーツにおいてコードに反する行為に罰則が課されるように、スポーツは現実を模倣することで成立している。

問四　傍線部4のように述べられるのはなぜか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　プロレスではまるでどちらかの死に到る闘争が展開しているかのようなパフォーマンスが提示され、その点でプロレスは他のスポーツとは異なるから。

b　プロレスでは超人的な肉体的条件が必要とされるように、現実の模倣が目指されておらず、その点でプロレスは他のスポーツと異なるから。

c　他のスポーツでは勝敗が重視されていないが、プロレスでは、死に到る闘争であるかのような展開が示すように、勝敗の意味が重視されているから。

d　プロレスでは超人的な肉体を備えることが必要とされながらも、暴力を抑制することが目指されており、その点でプロレスは他のスポーツと異なるから。

問五　傍線部5について筆者はどのように考えているか。もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　スポーツはローカルな文化的な意味を払拭していく過程で、立法者その他との関係を希薄にしていった。

b　身体的な競争はローカルな風俗慣習との結びつきを強化することで、スポーツに変わっていった。

c　スポーツに対する行政や立法者の関与が弱まっていくことで、スポーツはローカルな文化的な意味を払拭することになった。

d　ローカリティに規定されていた身体競技がスポーツになっていく過程は、それが公的な制度との関与を強めていく過程に重なる。

問六　本文の内容に合致するものを次の中から一つ選べ。

a　相撲は古典芸能に近い性質を持ち、非近代的な文化の残滓を含み、そのため相撲界への外国人の参加に抵抗している。

b　柔道に象徴されるように、スポーツは国際的なものになるにしたがって文化的に中性的なコードを備えるようになる。

c　国家を超えて選手が流入していくような現在の状況は、スポーツのコードのエスニシティを強化していくことにつながった。

d　スポーツは伝統的な文化の象徴的体系から離れていく結果として、多様なルールを持つようになる。

問七　日本のスポーツ史(とくに野球の歴史)ではしばしばある俳人の足跡が語られる。この俳人は雑誌『ホトトギス』で活躍し、評論「歌よみに与ふる書」の作者として知られる。この人物を次から選べ。

a　高浜虚子　　b　河東碧梧桐　　c　正岡子規　　d　伊藤左千夫